りかし

うやうよは春ハきさらぎ好きに
任へゆ春よそる梅もゝ色ゆし
きゑは呉葛をうふこ至ては乏
禍ハ邦くわ女乃母の時まいや
さう神人ゆやを見他らるゝ子
細あうゝうよ清靈篆を歌まては
雑よ吟激下はゝ神ぬきうと黒人

すはゞくずのも紀乃語らぬ老
思ひよ志津葉みろ池以乃岸
うひなよ浮舟みぎさえ葉祖とや
篠ふりまい市原乃への露わけて
月さき衣の鞍馬川橋をさまよ渡
ほどもなく貴布禰乃宮よ着に
ゆわく　いそぶやへ参りのは

あま中度報よわ宇の時参か
めさ悩し清果さまを渡まは那
今衣清方乃うへを清營惣り
敷重ては清中あ広哥老もや
けひては三衣よわ役ハ清余重
乃きましなく人毛子細老愚よ成度
との清敏ゆく人祖ま門乃座へ

此の亀を見て男小は赤き衣を
こちき顔には丹をぬり髪には
鉄輪をいたゝき三つの足に
火をともし口の内に縄をくはへ
なりたき鬼神となりあらふ
ひるとの此告よりは急此海を
あはてゝ行き乃さとを尽きて人

なんぼう奇特なる御事にて
此坐りて（丑刻）足ハ思ひもよらぬ
行ふはわれなりきらとゆくはま
ましてんなさめて人たひまて
此入ハ亀に（シカモ）以やくまゝの
あったる此葉想まてハ頭に
此男のまへゆきたるか様みゆ

あしねに雁は清明にもとる小
立越箸乃やまをもうしありしと
はや此なにがしの小案内申は
詞〽八秋まてわかるゝ　男〽さ女は
下京辺の者まてはりが此雁打殺
夢又忍くは雁よ飛やさんなふ
此々祭わてる　羊〽あらかしきや

是ハ女乃恨又を源な〳〵露里なる
人まてわつわいざとふた秋の
まかりけ風もあやまくみえ
折ひてはもしき様乃ことは
作り　男〽さん〳〵なま我りこくし
りんきはる本妻なは離ふ任里
新しき妻をとり　よりひては　りがあ

此ふらへて所勝をくらべ我行至
なれば謹上再拝　夫天ひらきさ地
かたまりしよりこのかた伊奘諾
伊弉冊の尊天乃岩くらにして
みとのまくはひありしより男女
夫婦のかたらひをなし陰陽乃
道なりぬ傷りあらはなさる

魍魎鬼神きはけをなしが
葉の露をとゞむるや大小の
神祇諸仏菩薩はじめ天童部九
曜七星二十八宿をはじめとし
まわ渡はしきや雨ふりは風
おとのうへなれは稲妻きらめきわたり
満く法界もさゝめき鳴動して

身のけよだちておそろしや

後シテ上 それ花ハ斜脚の暖風に
ひらけて同しく暮春乃雨に
ちる月ハ東山より出てはやく
西嶺にかくれぬ世上乃無常
かくのごとし因果ハ車輪の
下 めくるかことく我にうかりし

人ゝにたちまちむくひをみせん
恋の身乃うかふこと
なき賀茂川に沈みしハ水の
青き鬼 シテ下 我ハ貴布祢乃川瀬乃
蛍火 上地 頭に戴く鉄輪のあしの
シテ上 焔のあかきおになりて
上ヒ ふしたる男乃枕によりそひ

いつとおこよめはうしや
恨めしやはかと歎きし君時は
玉椿の八千世二葉乃松のすゑ
うけて替しかはらぬ思ひしま
なをとしもひそ君はふる世
あうらうし悲しやはら衛まそ
捨し捨て思ふ思ひの涙よ流人
人を恨ミ妻をかこちあはゝ
時は恋しくみかうらめしき
おきてもねても忘れぬ思ひ乃
因果はたそ悦まて添ふのきえ
なを世前をこゝろひとすしや
あし引神ゆもとぬ山乃旅よ
よまつく人の欲はおほ限るる

魍魎鬼神ハけがらハしや出よ
いでよとせめふせや腹立や
思ふ妻をはとらであまつさへ
神々乃せめをかうむる悪鬼の
神通々力自在乃いきほひ絶て
ちからもなく〱足よハ
くるまの廻りあふへき時節を
まつへしや先此たひハかへる
へしといふ聲はかりはさたかに
きこえていふこゑはかりして
姿ハ目にみえぬ鬼となりに
けり目にみえぬ鬼と成にけり